

鳥取市小・中・義務教育学校道徳郷土資料集

第三編〈児童・生徒用〉

鳥取市の志



令和3年3月
鳥取市教育委員会

志在千里 功在不舍



はじめに

鳥取市では、めざす子ども像として「ふるさとを思い 志をもつ子」を掲げています。ふるさと鳥取を愛し、志をもちながら夢や希望に向かってたくましく生きていける人づくりをめざしています。市内すべての中学校区では、小中一貫の教育に取り組んでおり、九年間を見通して子どもたちの心を育てるとともに、家庭や地域と一体となった道德教育を進めているところです。

本市ではこれまでに、鳥取市を築いてきた人々の生き方に学ぶ郷土資料として、鳥取市小中学校道德郷土資料集「鳥取市の志」（以下、第一編と記す）と「鳥取市の志 第二編」を作成し、各学校での道德教育の実践に活用してきました。鳥取市にゆかりのある人物の生き方に出会うことで、子どもたちが資料の人物への憧れや尊敬の気持ち、鳥取市や地域に対する愛着や誇りを高めたり、現在や将来の自分の生き方について深く考えたりする姿が見られました。子どもたちには、多くの魅力ある人物と出会わせたいと考えます。

この度、新たに作成しました本書「鳥取市の志 第三編」の郷土資料も第一編・第二編と同様、「この人物の生き方に出会わせたい」という各学校の熱い思いが込められています。本書では、第二編の資料の人物を他学年でも扱えるように作成した資料や、普段各学校での学習活動にもご協力いただいている子どもたちにとって身近な地域の方々の資料等も含まれています。本資料が、郷土愛を育み、志をもつて生きていくことのすばらしさを学ぶ大きな機会となることを期待しています。社会構造が急速に変化する予測困難な将来の社会を生きていくであろう子どもたちには、高い倫理観や人としての生き方、社会の在り方について自ら感じ、考え、他者と対話しながら自分なりの答えを見つけていく力を育みたいと考えます。鳥取市の子どもたちが将来の夢や希望をもち、自分の人生を勇気とたくましさで切り開いていく姿を懇願してやみません。

結びにあたり、地域の方々聞き取りをしたり、参考資料を集めたりして熱心に資料を作成・提供してくださった各学校の教職員の皆様、本書の編集にご尽力くださった郷土資料集作成検討委員会の皆様、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和三年三月

鳥取市教育長 尾 室 高 志





【 目 次 】



★ はじめに

★ わたしたちのふるさと 鳥取市

小学校・義務教育学校前期課程

低学年

- 1 前田さんからの手紙 〔前田 昭博〕……………1
- 2 さじのたからもの……………3

中学年

- 1 瑞穂生姜づくりの先生 〔下村 益雄〕……………7
- 2 幸せはこぶ 風車 〔岡田 良平〕……………11

高学年

- 1 大志をいただきすくすく伸びん 〔牛尾 晃之〕……………16
- 2 天地に抱かれた人生 〔田中 寒楼〕……………20
- 3 みんなの笑顔が見たいから 〔石田 一高〕……………24
- 4 自分らしさを求めて 〔福田 源衛〕……………28



鳥取市の木

さざんか

昭和18年の大震災、昭和27年の大火災で市街地のほとんどを失った鳥取市に緑を取り戻そうと、昭和43年5月2日に「鳥取市の木」とされたサザンカは、年間を通じてまちを緑で潤し、山陰の厳しい冬に花を咲かせるなど、鳥取市を代表するにふさわしい木として新鳥取市に引き継がれることとなりました。



市章

市章の由来

旧藩時代に因伯の印として使用された紋章（○は文、◇は武を意味したものとされている）を一つに重ね、その中に小てん（漢字の書体の一種）の「鳥」の字を組み入れたものを、大正2年7月26日に鳥取市の市章として決めました。



鳥取市の鳥

オオルリ

オスは、頭から背、尾まで上面がコバルトブルー。美しい鳴声で知られる鳥で、ウグイス、コマドリと並んで、日本の三鳴鳥といわれています。本市では、春から秋にかけて市内全域に生息しています。特に、樗谿公園大宮池周辺、袋川・佐治川・河内川などの市内各河川の上流域でよく見かけられます。



鳥取市の花

らっきょうの花

鳥取市が全国に誇る「鳥取砂丘」において、10月から11月初旬にかけて砂の畑を赤紫のじゅうたんで覆う「らっきょうの花」は、中国原産のユリ科の多年草で、江戸時代の参勤交代の折に持ち帰られ伝わったものが最初であるとされ、今では鳥取市を代表する特産品のひとつとなっています。

小學校

義務教育學校前期課程



前田さんからの手紙

前田昭博

みなさん、こんにちは。わたしは本鹿に住む前田昭博です。白磁という焼き物を作っています。

わたしは、小学生のときから図画工作が大好きで、大学では、好きな焼き物を習っていました。好きなことを仕事にしていけたらいいなと思い、大人になってもずっと続けてきました。自分の思ったような作品ができなくて、何度も失敗しました。やめようと思ったこともありましたが、「焼き物が好き」という気持ちは変わりませんでした。

「もう一年がんばろう。もう一年がんばろう。」と思って、三十六歳の時、大きなコンクールで優秀賞をいただきました。あきらめないでやってきてよかったと思いました。そのときは、とてもうれしかったです。これからも、ずっとチャレンジして、いい作品を作りたいと思います。

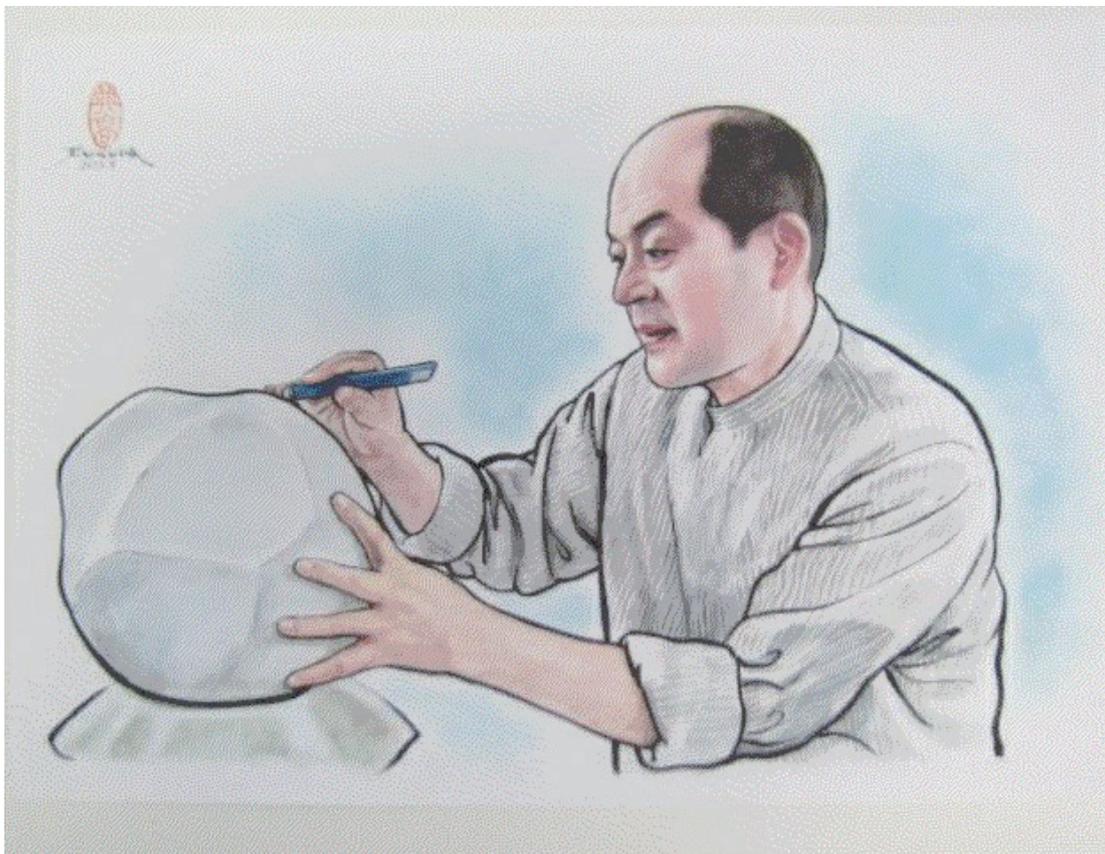
さて、みなさんは、今、上学年のお兄さんやお姉さんが、毎週水曜日の給食の時間に焼き物の茶碗でご飯を食べていることを知っていますか。茶碗は、一つ一つ手作りで、茶碗は落としたり割れますね。割れないように大事に使うという気持ちは、みなさんの心に生まれた

らうれしいと思^{おも}って、使^{つか}っていたたくように
お願^{ねが}いしました。

茶碗^{ちやわん}は一つ一つ手作^{てづく}りなので、みんなちが
います。みなさんも一人^{ひとり}一人^{ひとり}ちがいますよね。
一人^{ひとり}一人^{ひとり}にいいところがあります。そのいい
ところを伸^のばしてください。

西郷^{さいごう}には、焼^やき物^{もの}やガラ^がラス、木^も工^{こう}など、も
の作^{づく}りをされる方^{かた}がたくさん住^すんでおられま
す。そして、自^し然^{ぜん}がすばらしいです。わたし
は西郷^{さいごう}が大^{だい}すきです。

(西郷小学校 自作)



絵 福田典高

さじのたからもの

わたしの学校には、「五つのたからもの」という歌があります。

入学しきやそつぎようしきなど、学校の大切な行事の時に、いつもみんなで歌います。

もうすぐ、そつぎようしきです。あさの会で

CDからこの音楽がながれてきました。

♪ 大切なわたしたちのふるさと

守っていききたい「五し」があるんだ

みがかれた石 みずみずしい梨

輝く星 伝統の和紙 楽しい佐治谷ばなし

ずっと ずっと 大切にしよう

わたしたちの町・・♪

わたしは、この歌がとても

好きです。この歌には、さじ

川石や梨や星や和紙や佐治谷

ばなしのことが歌ってあるし、

みんなで歌っていると、なん

だか心がほんわかとするからです。

ふと、どうしてこの歌ができたのか知りたく

なりました。そこで、たんにんの先生に聞いて

みました。先生は、

「こんなお話を聞いたことがありますよ。」

と教えてくださいました。



平成十九年、その年の六年生が中心になって、「さじのことをもつとたくさんの人に知ってもらおう。」「さじのよさを人につたえよう。」と考えて、さじのいいところが見つたわる歌を作ることになりました。

全校に「さじのいいところはどこですか。」とアンケートをとりました。たくさんのおうぼがあった中で、五つのものがのこりました。「さじ川石」と「梨」と「星」と「和紙」と「佐治谷ばなし」です。一つ一つのいいところを、四行であらわすように、六年生がなんどもなんども話し合っ、て、ようやく、歌の言葉がで

した。ちょうどみんな、言葉のさいごに「し」がつきます。ここから「五し」という言葉も生まれました。

こんどは、それにきよくをつけることになりました。ちょうどその年に、六年生のたんにんの先生が、ピアノの上手な先生で、さじの人やしぜんやけしきを思いうかべながら、きよくをつけてくださいました。こうして「五つのたからのもの」がたん生したのです。

先生は、こんなことを言っておられたそうです。「さじには、たくさんすばらしいたからものがあります。この歌とともに、さじの人やも

の、しぜんを大切にたいせつにする人ひとになってください。

いているといいなと思おもいました。

この歌うたは、これでかんせいしているわけでは

(佐治小学校 自作)

ありません。これからみんなで歌うたいながら、

えんそうをかえたりくふうしたりしていつて

ください。」

と。

わたしは、この話はなしを聞きいて、とてもびつくり

しました。今いままでなにげなく歌うたっていたこの歌うた

に、こんなふかい思おもいがあつたなんて知らな

かったからです。

これから「五いっつのたからもの」を歌うたうときは、

今日きょうのお話はなしを思おもいながら歌うたいたいです。

わたしが大人おとなになっても、ずっとこの歌うたがつづ



さしだに
佐治谷ばなし



がわいし
さじ川石



わし紙



なし梨



ほし星

みずほしょうが
瑞穂生姜づくりの先生

しもむらますお
下村益雄

「わあ、大きなシヨウガ。これを植えるんですか。」

五月のある日、わたしたち瑞穂小学校の三年生は、いよいよ学校の農園にシヨウガを植えることになりました。

わたしたちの住む瑞穂地区では、「瑞穂生姜」と「日光生姜」が地域の特産品です。そんな



地域の特産品や地域の農業をもっとよく知ろう、体験しよう、と、三年生になるとシヨウガを植えて育てる体験学習をします。

シヨウガづくりを教えてくださるのは、瑞穂生姜づ

くりの名人、下村益雄さんです。

シヨウガの植え付けの日、下村さんは、親シヨウガをたくさん持つてこられました。



親シヨウガを手に取ると、ずっしりと重く、わたしの顔ぐらい大きいのです。わたしは、親シヨウガや畑を見て、むねがどきどきしました。

はじめてのシヨウガ植えは、下村さんに教えていただいて、なんとかうまくできました。

「これからは、どんな世話をしていたらいいですか。」

「しばらくしたら、草がどんどん生えてきますな。草がたくさん生えたら、肥料の栄養を草

が取ってしまうから、シヨウガが大きくなり
ませんな。だから、草をしつかり取ってシヨ
ウガが大きくなるようにしてくださいな。水
やりもしてくださいな。」

下村さんの言葉を聞いて、わたしは毎日がんばろうと思いました。

次の日から、毎朝、学級みんなと畑の様子を見に行きました。一週間ぐらいうると草が生え始めたので、みんなで草取りを始めました。草を取りながら、早く芽が出ないかな、どんな芽が出るのかなと楽しみました。

一か月後、小さな芽が出た芽が出てきました。



七月、朝からあつく、「朝の活動」の草取りは、少し草をぬいただけであせが流れ出ます。

取っても取っても、草が
どんどん生えてくるの
で、初めはがんばって
いた草取りも、今はおしゃ
べりばかりで、あまり取
れていません。草だらけ
の畑を見て、もつと取ら
ないといけないなと思
いますが、あついのと草
の多さについつい手が
止まってしまいます。

ある日のことです。体育の水泳でプールサイドにならぼうとしたとき、プールの横のシヨウガ畑で働いている人がいました。その日の朝はたくさん生えていた草が、今はきれいにありま



せん。

「あつ。下村さん。」

長そで長ズボンを着た下村さんが、一人で働いておられました。下村さんは、あせをふきながらにっこり笑顔で手をふられました。

体育の学習の後、畑に行くと下村さんはもう帰っておられました。

先生から、下村さんのことを聞きました。

「下村さんは、今までも、みんなが学習している間に畑の様子を見に来られて、シヨウガが病気になっていないか、虫に食われていないか気にしてくださっていたんだよ。今日も、ご自分の畑の仕事の合間に、そろそろ土よせをしないとシヨウガが大きくならんからと来られたんだそうです。みんなが気づかないところで、みんなやシヨウガを見守ってくだ

さっているよ。」

わたしは、はつとして、あせをふきながら働かれていた下村さんを思い出しました。草がなくなり、うねが高くなった畑で、シヨウガは大きく葉をのびし生き生きしているように見えませんでした。

十一月、今日は、待ちに待ったシヨウガの取り入れです。畑からぬいたシヨウガの土をはらい落とすと、大きくて白くかがやしく新シヨウガが出てきました。

「わあ、大きいのができてる。ほら、顔より大きい。」

畑のあちこちでみんなのよろこぶ声がひびき



ます。はさみでくきや根を切り落とすと、畑はシヨウガのさわやかなかおりでいっぱいです。

わたしは、たくさんの取れたての瑞穂生姜を見ながら、あつい夏からこれまでの草取りや、わたしたちでやった二回目の土よせのたいへんさを思い出していました。

下村さんは、みんなの様子をにこにこ笑顔で見とおられました。

わたしは、とれたシヨウガをかかえて、下村さんにいろいろ伝えたいなと思いました。



(瑞穂小学校 自作)

下村益雄さん

鳥取いなば農協気高営農センターで、営農指導員として農業指導に長く関わられた。瑞穂地区において、水田の転作として生姜を大々的に取り入れる事業に携わられた。

平成十八年ごろ、それまで学校の子どもたちに生姜づくりを教えておられた中原孝志さんに依頼され、学校の生姜づくりの先生になられた。中原さんに依頼されたとき、自分が子どもたちに教えられるかなと不安に思われた。しかし、昔と違って若い人たちがだんだん農業に目を向けなくなってきたことを心配され、瑞穂の子どもたちに自分で土をさわり自分で育てることで、農業の大切さや土で育てものの命をいただくことの大切さを学んでほしいと考え、瑞穂小学校での生姜づくり指導を引き継がれた。

幸せはこぶ

風車かざぐるま

岡田良平おかだりょうへい

赤、青、黄色……。色とりどりの手作りの風車かざぐるまが、鹿野町の家の軒先のきさきでくるくると回っています。この風車を作ったのは、鹿野町に住む岡田良平さんです。



岡田良平さんは、昭和八年（一九三三年）、鹿野町で生まれました。せんそう中で、食べるものも手に入らない時代でした。そんな中、お兄さんに教えてもらって風車を作ったり、コマ

回しをしたりして遊んでいました。子どものころの良平さんが得意だったのが、もの作りです。手先が器用で、「こんなものがほしいな。」と思うと、仕組みも自分で考え、ざいりようを集めてはいろいろなものを作っていました。小学校六年生の干しイモ作りで、サツマイモをつるすあなを開けるための道具を作ったときには、まわりのみんながとてもおどろき、自分の家にも作ってほしいと、おねがいきたほどでした。

大人になると、かじや（包丁や刀をつくる仕事をする人）となって、緑さんとけっこんしました。その後、かじやはなくなり、鹿野町今市にある「植田漁具」ではたらき始めました。こ

ここでは、良平さんの得意なもの作りを生かして、
でした。

つり具を自動で作る機械を発明しました。一号
機では満足せず、より安全で使いやすい機械に
ぞ。」

なるように、何度も改良を重ねました。そして、
「ちようどいい大きさの木箱があつたよ。これ
をテーブル代わりにするといい。」

なんと六号機まで作り上げ、良平さんが作った
「うちでぬつたぞうきんをあげるから、これを
機械は今も使われています。」

良平さんと緑さんは、わかいころ、とてもび
使いんさい。」

んぼうな生活を送っていました。米も、しおも
良平さんと緑さんは、次から次と、鹿野町の人
ない。ごはんを食べるためのテーブルも、そう
たちからいろいろな物をもらいました。そして、

じに使うぞうきんすらない。そんなたいへんな
「びんぼうだけれど、二人で力を合わせてがん
生活でした。「これからどうやってくらしてい
ばって生きんさいよ。」

けばいいのだろう。」と良平さんが思っていた
とはげましてくるのでした。良平さんと緑さ
ときに声をかけてくれたのは、鹿野町の人たち
んは、このとき、鹿野町の人たちにいただいた

ご恩^{おん}をいつまでもわすれないとちかいました。

年をとって植田漁具をやめることになった良平さんは、これから何をしようか考えました。

そのときに思い出したのは、わかいときに自分たちをすくってくれた鹿野町の人たちの顔でした。あのとときに受けたご恩^{おん}を、今こそ返したい。自分のために時間を使ってもよいけれど、そうではなくて、鹿野町のために自分にできることはないだろうか…。

良平さんは、風車を作って町中にかざろうと思いつきました。子どものお兄さんといっしょに作った、あの風車です。それを鹿野町の家の軒先にかざったら風車を見た人たちに

きつとよろこんでもらえる、そう考えた良平さんは、緑さんに協力してもらって風車作りを始めました。

まず、色紙や竹のぼうなど必要な材料を自分たちで集めました。そして、色紙の大きさ、少しの風でもよく回るようにするしかけなど、いろいろと試しながら作りました。雨にぬれてもいいように、水をはじく液を色紙にぬるくふうもしました。そして、鹿野町への思いをこめて作った川柳をつけて完成させました。良平さんは毎日毎日作り続け、できあがった風車は二本にもなりました。

その後、良平さんと緑さんは、風車を軒先に

かざってもよいか、鹿野町の家を一けん一けんたずねてまわりました。車のめんきよを持っていない良平さんと緑さんは、風車を乗せた自転車を引き、歩いてまわり続けました。何十けんもめぐり、ゆるしをもらった家の軒先にかざってみると、風車はくるくるとよく回り、町のふんい気にぴったりでした。風車をかざらせてもらった家の方にも、とてもよろこんでもらいました。

良平さんと緑さんは、この活動を約三十年間続けています。この間に、良平さんは目や腰こしが悪くして思うように体を動かせなくなりましたが、決してこの活動をやめませんでした。

今では良平さんの作る風車は家の軒先だけでなく、鹿野町の銀行や鹿野学園にもかざられています。県外からも、「鹿野町で出会った風車のすばらしさがわすれられない。一ついただけないだろうか。」と手紙が来るようになりました。



「くるくると 幸せはこぶ 風車」 良平

鹿野町を大切に思う良平さんと緑さんの心

のこもった風車が、今日も
くるくると回り続けていま
す。

(鹿野学園 自作)



大志をいただきすくすく伸びん

牛尾晃之うしおてるゆき

「大志をいただきすくすく伸びん」

私たちの学校には、そう刻まれた石の門があります。登下校時、私はいつもその門のそばを通っていましたが、そのことばの意味を深く考えたことはありませんでした。

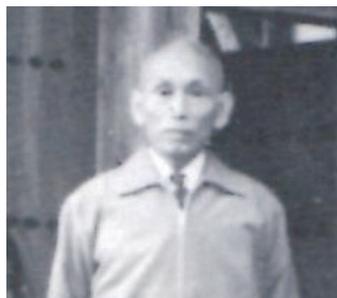
ある日、総合的な学習の時間に地域の方から学校の歴史に関する話を聞きました。その方は現在、「神戸教育後援会」の会長をしておられる方で、学校や私たちのことを応援してください、さっています。会長さんの話を聞き、私たちが



毎年楽しみにしている「わくわく探検学習」や卒業生一人一人に贈られるアルバムが、石門のことばとつながりがあることに驚きました。そこには、私たちが住む神戸地区の発展を願った一人の人物がいました。

その人物とは、一九〇五年（明治三十八年）三月、神戸村に生まれた牛尾晃之さんです。晃之さんは若くして村の役人となりました。仕事を通して、村の人たちの生活が今よりもっとよくなるだろうかと考え始めるようになりました。

特に、道路はせまく雨が降るとぬかるみ、歩くにも車に乗るにもたいへん困りました。しかし、道路をよくしようとする機運がなかなか高



まりません。道路は荷物を運んだり人が行き来したりするためになくってはならないものです。また、人々の生活を豊かにし、命を守ることにもつながります。

「道路には日曜も祭日もなく、夜と昼との区別もない。また、学校や会社に行かない日はあっても、道を歩かない日はない。」

そう言って晃之さんは村の人たちの先頭に立ち、役所や議員さんのところに出かけ、県道の改良の必要性を説いて回りました。地区として積極的に動くことが大事だと考えたからです。ただ時機を待つのではなく、地区をしつかりまじめ、いつでも改良の必要性を説明できる体制をつくらなければならぬと考えていました。

一九二五年（大正十四年）に始まった県道の改良工事は五十余年にも及びました。晃之さん

は改良に取り組んでいる途中、こう話していました。

「なぜ、もつと早くから運動を起さなかつたのかということをお反省しなければならぬ。『今からでも遅くはない』ということばがある。これは、何事についても大切な教えであるまいか。」

また、県道の改良という大事業をなし終えたときは、

「何事もみんなの力でなければならぬ。『みんな』という意味は、お互いに自分の任務に忠実に働くことである。船長に機関士の仕事をせよとは滑稽だ。船長には船長の責任があつて、舵かじを誤ると転覆てんぷくする危険がある。頭に立つ人の働き方によつて前進もし、後退もすることは明白だ。」

ということばを残しました。

晃之さんは政治家、後藤新平ごとうしんぺいが残した「人の仕事の中で最も大切なことは人をつくることである」ということばに共感し、教育にも力を入れました。学問は物事の真理を探究することであり、学問により人が育ち幸福になるという考えから、人づくりの中心は学校教育だと考えました。学校教育を理解し、背後から援助し、協力していくことが地域住民の責務であるとも思いました。

そこで、晃之さんはPTAの仲間や校長先生、教頭先生と相談し、「神戸教育後援会」を結成し、次の三つのことに取り組みました。

- 一 学校教育をよく知ること（学校は今どんな教育をしているのか、子どもの学習状態はどうかを知ること）

- 二 子どもの福祉の向上と教育環境をよくすること（物心両面からの支えとならねばならない）

- 三 お互いが勉強すること（もっと幅広い勉強をすることが大切である）

晃之さんたちは、この取組を進めるために地域住民に寄付金を募もって基金とし、卒業生に記念品を贈ったり、学校庭園の造成をしたりするなど、子どもたちや学校の設備をよくするため使うことを決めました。晃之さんは「神戸教育後援会」の初代会長になり、仲間とともに学校設備や教育環境を整えていきました。

学校の正門の「大志をいだきすすく伸びん」のことばは、晃之さんたちの思いが文字になったものです。結成から六十年。県内外から集まった寄付は、神戸小学校の子どもたちのために使

われています。

今年も夏休みの奉仕作業がやってきました。地域の人も草刈や木々の伐採ばっさいをしてくださいます。学校庭園の方を見ると、枝を切ったり形を整えたりしてくださっている人たちがいます。私は、晃之さんの思いが今に伝え続けられていることに気づきました。

校庭を見回すと、草を刈り取った跡が太陽に照らされきらきらしていました。私は胸が熱くなるのを感じながら、まだ草をねこ車に積み終えていない友だちのところいちもくさんに一目散に走っていききました。

牛尾晃之氏 年表

- 一九〇五 鳥取県気高郡神戸村（現 鳥取市中砂見）に生まれる。
- 一九二五 神戸村役場の収入役となり、道路改良に着手（二十歳）
- 一九三二 役場を退職し、神戸郵便局を新設（二七歳）
- 一九三八 村会議員となり、道路改良にますます意欲的に取り組む。（三三歳）
- 一九五九 神戸教育後援会を発足、会長となる。（五四歳）
- 一九六二 神戸診療所の施設整備費として七万五千円や自動車庫を寄付（五八歳）
- 一九六八 道路改良工事を進めるため、県道改良促進委員会を結成（六三歳）
- 一九七九 道路改良工事が完了となる。（七四歳）
- 二〇〇〇 亡くなる。（九五歳）

（神戸かんど小学校 自作）

※1 明治から大正にかけて活躍した日本を代表する政治家

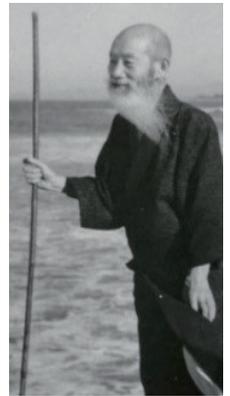
天地に抱かれた人生

田中寒楼

『くさ萌の いのちを人に わかたばや』



新緑のころのみずみずしい大自然のエネルギーを受けて、夢に向かってつき進んでいた少年時代を思い起こしてよんだ俳句です。この俳句は、鳥取市立西郷小学校に句碑として石に刻まれています。この歌を作った人の名は、田中寒楼といえます。みなさんにとって、初めて聞く名前かもしれませんが、正岡子規に「因幡（今の鳥取県東部地方）に寒楼あり」と言わせたのが田中寒楼です。約三十センチ近い白いあごひげに、身長くらいのおつえを引いて歩く、まるで仙人のような姿をしています。



田中寒楼は、一八七七年（明治十年）鳥取市河原町小畑に生まれ、名を国三郎といいまし

た。寒楼と名乗ったのはおそらく、「国三郎」↓「国寒郎」↓「寒郎」↓「寒楼」としやれてみせたかったのでしょう。彼は、家から約二キロ上流の北村小学校（のちに修徳小学校分校、統合されて西郷小学校となる）から鳥取県尋常中学校（のちの鳥取西高）へ進学しました。中学四年生（十九才）のころから、俳句に興味を持ち始め、正岡子規が指導する新聞の俳句らんに熱心に投稿し始めました。俳句の世界を夢見ていた寒楼は、正岡子規に会った翌年の一九〇〇年（明治三十三年）、六年間におよぶ俳句をよむ旅に出かけます。一九〇六年（明治三十九年）二十九才の五月、故郷にもどった寒楼は、母校修徳小学校（のちの西郷小学校）

の先生になりました。その後、二十年間の教師生活を送り、五つの小学校で校長を務めます。寒楼の話はとにかくおもしろく、「校長先生のおとぎ話」とよばれ、子どもたちが校長室までむかえに行くほど人気がありました。

しかし、俳句への情熱が冷めない寒楼は、一九二五年（大正十四年）、四十八才で先生をやめ、その後本当に彼らしい俳句生活を始めることとなります。時代の急変に全く流されることなく、俳句をよむ旅の生活に明け暮れていくのでした。

五十才の冬、妻かつを亡くした寒楼は奈良にいました。おそらく心の整理がしたかったのでしよう。

『ゆくところなくて 落ち葉を見ていたり』

この時よんだ俳句です。初老の男のさびしい姿

が、冬日に照らされているだけです。冬空を見上げていたその時です。

『おちてゆく 木の葉を大地 きてうけぬ（受けたという意味）』

たった一枚だけ、木の葉がどこからともなく、大空の一角からまい降りてきました。音もなく、ひらひらと。そして、ゆっくりまい降りてきました。すると、どうでしょう。すうつと大地が上にもり上がって、その一枚の木の葉を、静かに受けたではありませんか。もちろん、これは彼の目のさつかくでしょう。しかし、寒楼はそう感じたのです。落ちていく一枚の木の葉は、寒楼そのものです。寒楼は、一枚の木の葉に似たうすつぺらで、はかない存在なのです。そこに、きせきが起こったのです。木の葉が、大地に落下したのではなく、大地の方がもり上がっ

て、木の葉を受けてくれたのです。自分は、この大地に抱だかれていのです。何を落ち込むことがありませんか。こんなにもありがたい人生を歩あゆませていただいているというさとり、寒楼はいたったというのです。

『月ももう出てこい 山も低うなれ』

この俳句も、同じような気持ちで生まれ、生きる希望がわいてくるようです。

一九六〇年（昭和三十五年）八十三才のとき、子の春子の家に住むことになりました。そして、一九七〇年（昭和四十五年）三月十二日、春子らにみとられて静かに眠るように息を引き取りました。満九十三才と二十四日、大往生だいおうじょうをとげました。

田中寒楼の生涯しやうがいのは、実に三十五年にわたる俳句の旅でした。

『天地あめつちのむたきわ みなきみ生いのちを
うつせみの世と思うべしやは』

寒楼最高の詩うたであるとされ、
霊石山最勝寺れいせきざんさいしやうじの石碑せきひに刻きざまれています。天地に抱だかれたすべての生命は、むなくはかないと思っではいけないということをよんでいるのでしよう。「今、ここで生きていることを、人間に生まれたことを喜ぶ、これこそが人間の生きる意味である。」これが寒楼なのです。



『人間に生まれているうれしさを
このとしにして 知り初めにけり』

寒楼ゆかりの地



〔 参考資料 〕

- ・『宇宙をもらった男田中寒楼』 牧野和春著
- ・『郷土出身文学者シリーズ③』 県立図書館発行

〔 参考文献 〕

寒楼八十六才にしてよんだ歌です。
 西郷小学校では、田中寒楼の志を受けついで、
 毎月全校児童が俳句を作り、俳句大会を行って
 います。

(西郷小学校 自作)



寒楼句碑

みんなの笑顔が見たいから

石田一高

「鷲峰山がよく見えるで。」

「この登りぼうを使うとすぐにおりられるよ。」
できあがったばかりの遊具に子どもたちが集まり、楽しそうな声がひびきわたっています。

この遊具の名前は、「瑞穂アスレチック」。
瑞穂小学校の児童五十一名で話し合って決めた名前です。

そして、このアスレチックを発案し手作りしてくださった「チーム瑞穂・アメリカンフー」の中心人物が、石田一高さんです。



木と一体の
瑞穂アスレチック

そんな石田さんたちが、どうしてこの遊具を作ることになったのでしょうか。

石田さんは、瑞穂小学校の卒業生で、家は学校のすぐそばにあります。瑞穂小学校とのかかわりが深まっていったのは、お子さんが小学校に通い始めたころまでさかのぼります。

もともと、物作りや人を喜ばせることが大好きだった石田さんは、PTA会長などもされながら、当時から様々な活動をしてこられました。

お子さんが卒業されてからも、瑞穂の子どもたちを楽しませようと、手作りの人形を使った人形げきを行ったり、プロ顔負けの作品を見せてくださいたりしました。また、地区の文化祭では、ステージ上の人物が消えてしまうというイリュージョンまでされたこともあります。

自宅には、ステンドグラス作りの工房や手作りの遊具などがあり、地域の子どもたちを楽し

ませてきました。さらに、毎年クリスマスシーズンになると、色あざやかなイルミネーションで、行きかう人の目を楽しませてくださっています。

およそ二十年前からミニヘリコプターで、十年ほど前からはドローンを使った上空からのさつえいで、学校周辺の様子や瑞穂の豊かな自然を広く発信されてきました。

今は、学校の外部講師としてクラブ活動でものづくりの楽しさを教えてくださったり、学校運営協議会の委員、学校ボランティアとして毎朝の登校時に学校前で交通安全指導をしてくださったりしています。

そんな中、瑞穂アスレチック作りは、平成三十年のある日、校長先生のこんな一言から始まりました。

「瑞穂の子は、毎日歩いて遠くから通っていて足こしが強いけど、あく力は弱いなあ。何と

かして、普段ふだんの学校生活で高められんかなあ。」

ちようどそのころ、登りぼうの遊具も修理中でした。

このときその場にいあわせていた石田さんは、校庭にあるカエデ科の大木「アメリカンフー」に目をつけました。

「あの大木を使って、木登りなどができる遊具ができないものだろうか…。」

石田さんは、すぐに動き始めました。まずは、昔からの地域の仲間に声をかけたのです。

「よし、やろう。おもしろそうだなあ。」
一人、二人と活動に加わっていきました。

「登りぼうは、みんなが使えるように二本にしようで。」

「危なくないように手すりもつけんとなあ。」

「夏には葉がいっぱいしげるから、木かげで休めるように、いすも作ろう。」

考えが、次から次へとうかんできます。

アイデアアマンの石田さんは、長いビニルパイプを地中にうめていき、その両はしを地中に出した「すまーとホン」まで手作りし、はなれたところからでも会話が楽しめるようにしてくださいました。遊び心が満さいです。

日に日にできあがっていく遊具に、子どもたちも、いつできるのかなと心待ちにしていました。

手作りの「すまーとホン」



二〇一八年五月九日。ついにそのときがきました。瑞穂アスレチックたん生の日です。校庭のアメリカンフーの回りには、児童、職員、「チーム瑞穂・アメリカンフー」のみなさんが集まり、開始式が行われました。

石田さんは、楽しくけがなく遊べるように、

遊具の使い方についての約束も作ってくださいました。

(使い方)

- ・ぬれているときは使えません。
- ・木の上に乗るのは5人までです。ゆずりあって使いましょう。
- ・枝の先には行きません。
- ・フードのついた服の人は使えません。
- ・手すりの上には乗りません。
- ・飛びおりません。
- ・下りる人を先に行かせます。
- ・人をおしたり引いたりしません。
- ・おにごっこでは使いません。



そして、校長先生のお話、児童代表のあいさつのあとに、次のようにお話をされました。

「このアメリカンフーは、今は葉が少ないですけど、夏になるとたくさん葉をしげらせます。秋には紅葉こうようしてとてもきれいになると思っています。階段を登って上に行くと、鷲峰山じゅうほうがとてもきれいに見えます。みんなが、きまりを守ってけがないように楽しんで使ってください。」

石田さんたちの思いが、わたしたちにも伝わってきました。今は、お弁当の日に、木かげで昼食をとる子どもたちの姿も見られます。

「自分がおもしろいと思うことをしとるのだが。」と、笑顔で話されるその姿の向こうに、地域や学校、そして、何より「子どもたちのために」という温かい気持ちがかめられているように感じました。

今朝も、登校を見守ってくださる石田さんの、「おはよう」の声がひびいています。

(瑞穂小学校 自作)



自分らしさを求めて

〈福田源衛〉



「源衛、どうか家業をついで
おくれ。」

絵筆を手にして窓の外をなが

める青年に、母は必死になって頼んだ。

彼の名は福田源衛。画家になることを夢見て、

鳥取から京都へと出て修行の日々を過ごしてい

た。その源衛に、父の死の知らせが届いたのは、

ほんの数日前のことだった。

若い源衛は迷った。農業に生きるべきか、絵

画の道を選ぶべきか。鳥取にもどった彼は、湖

山池のほとりで写生をしながら考え続けた。夕
日に映えた水面に、ピチツ、ピチツと魚がはね
る。一枚の絵画のような景色であった。源衛は、
その光景にはっとした。

「絵は家においても描くことができる。この鳥取
の美しい自然から教われればよいのだ。父の意
志を継いで農業をしよう。そして、桂見の村
の発展につくそう。」

心を決めた源衛は、園芸に畜産にと、農業の様々
な面の研究に取り組んでいった。しかし、桂見
の地で効果的な農業を見つけることは、なか
なかなできなかった。

五月のある日、湖山池から近くの小川に群れ

を成してさかのぼる鯉こいや鮒ふなと、それを捕り歩く村人たちの姿が目にとまった。食用として家で調理したり、市場へ出荷したりするためである。毎年この時期になると、村もたいへん活気づくのだった。

鳥取の人々の貴重な栄養源のひとつとなった。

鯉の養殖で自信を得た源衛は、次に

「自然は大きいといっても、限りがある。いくらたくさん魚がいても、捕り続ければ数が減

スツポンの養殖の研究を始めた。スツポ

る。一粒の卵を養殖で何倍にも増やせば、自然の数を減らすことはない。多くの人に安く

ンは、鯉よりもさらに需要が多く、値段も高く売ることができからである。

ておいしい魚を届けることができる。」

しかし、スツポンの養殖は困難の連続だった。

源衛は、さつそく鯉の養殖に取りかかった。

スツポン同士が体を傷つけ合ったり、池の底に穴をあけて逃げ回ったりすることを防がなければならなかったからだ。

源衛のねらいは当たった。源衛が育てた魚は、



福田源衛の養魚場

洪水などの自然災害も追い打ちをかけた。特に、一九四三年（昭和十八年）の鳥取大震災では、養殖場に壊滅的かいめつてきな被害を受けた。しかし、どんな困難に直面しても、源衛は決してあきらめなかつた。

こうして育てられた鯉は、鳥取県内だけでなく、中国地方各地へ、スッポンは東京や大阪へと出荷された。

養魚場を成功へと導いた源衛だったが、絵画に対する思いも忘れてはいなかつた。いそ



がしい仕事の合間を見ては修業を重ね、桂山という名前で数多くの名作を残した。

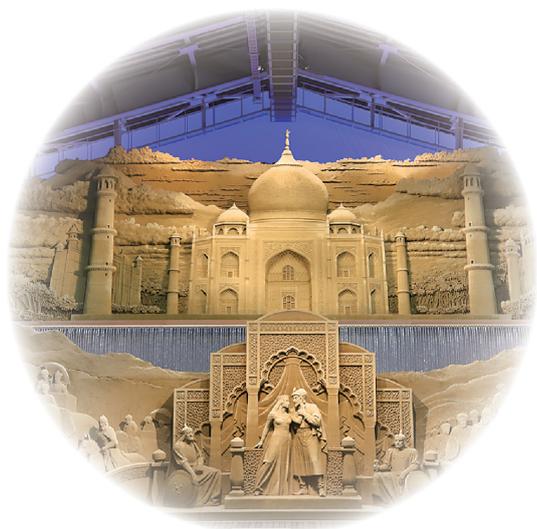
「自分は自分なりに芸術の道をひたすらにみがいていこう」と決意した思いは、湖山池のほとりの桂見の地に、見事に咲き誇ったのだった。

（『松保郷土誌』を一部改作）



中學校

義務教育學校後期課程



ふる郷を思う心

ありまよりきち はまもとのぶお
有馬頼吉と濱本信雄

故郷を愛し続けた医学者 有馬頼吉

願わくは この校舎より 千人の

ジンギスカンと 二宮尊徳を出さん

(詠み人 有馬頼吉)

現在、「結核^{※1}」という言葉聞くことはほとんどなくなりましたが、二十世紀初頭までは、治すことの難しい、恐ろしい病気でした。頼吉は、この結核の予防・治療に役立つ薬を開発した日本での第一人者で、世界的にも大きな貢献をした人です。

頼吉は、一八八一年(明治十四年)現在の福部町栗谷^{くりたに}の農家の三男として生まれました。元塩見尋常



小学校を卒業した頼吉は、農業を手伝っていましたが勉強したいという気持ち

京都で医者をしている母の兄、谷口修治のもとで半年間勉強しました。その後、鳥取で医院の書生^{※3}をし、大阪へ出ましたが、大阪では大変な苦勞をしました。時にはご飯に塩をかけただけで食事を済ますこともあり、夜鳴きそば^{※2}の屋台を引いて学費や生活費を稼いだこともありました。

このような苦勞を重ねて、頼吉は大阪医学校予科、さらに大阪府立高等医学校へ入学。二十歳になった頼吉は医学校で認められ、京都帝国大学医科大学助手などを経て、一九一二年(大正元年)大阪府立高等医学校の肺ろう科長になりました。翌年、頼吉はドイツ、オーストリアに留学し、幅広く医学の研究を積んでいきました。

一九一七年(大正六年)になると、頼吉は日本で最初の公立結核診療所である大阪市刀根山療養所の初代所長になりました。所長になった頼吉は、研究室の同僚たちと結核の治療、予防薬の研究を繰り返

しました。そしてついに、結核の予防と治療に効果のある薬、A O（アオー）を開発しました。世界的にも画期的な結核予防治療薬でした。この薬の名前は、この時の開発者たちの名前の頭文字をとって名づけられました。

A Oの開発発表の後、頼吉の活動は国際的になりました。新たに有馬研究所をつくり、A Oの更なる研究と製造に乗り出した頼吉たちは、国内の結核予防のために多くの貢献をしたわけではありませんでした。A Oの研究成果が発表されると、海外からの反響も大きく、頼吉をはじめとして研究所の所員たちは幾度となくヨーロッパを中心に世界各地へ出かけ、A Oの普及に力を尽くしました。

このように結核という難病を克服するために非常に忙しい毎日を送っていた頼吉でしたが、故郷の福部村のことも忘れることはありませんでした。一九三七年（昭和十二年）河本村長が就任すると、

村長は「人材育成」を大きな柱として村政を進めました。その事業の一つとして農村の中心となるべき若者を育成するために「尚志塾」の発足を計画しました。ところが、この予算を村議会にはかったところ、反対多数で否決されてしまったのです。

頼吉は、かねてより故郷の後輩たちがどんどん社会で活躍することを願っていました。福部村の小学校の新築校舎を見て、頼吉が詠んだ歌が残っています。

願わくは この校舎より 千人の

ジンギスカンと 二宮尊徳を出品

ジンギスカンとは、世界にはばたく人のイメージでしようし、二宮尊徳は心を磨いて社会の役に立つ人のイメージのようです。その様な人が故郷の福部村から数多く巣立ってほしいと願っていたのです。

そんな折、尚志塾の話聞いた頼吉は、その考えに賛成し、開設費用を全額寄付することを申し出ま

した。こうしてついに、福部村の青年の教育の場が
でき上がりました。

頼吉は、終戦直前の一九四五年（昭和二十年）七月二十日に亡くなりました。そして残念なことに頼吉の最大の遺産であるA O結核予防治療薬は、アメリカ占領軍の規制により、姿を消してしまいました。

しかし、頼吉の心は福部村に残りました。一九七九年（昭和五十四年）、先ほどの歌を含む頼吉の歌集「美稲」（うまいいね）が生家に残っていることを知った当時の村長である浜本力六^{りきむ}は、その再刊を行いました。そして、県下の若者に結核の根絶と故郷の後輩の活躍を願っていた頼吉の心を知ってもらおうと、県下の施設へこの歌集を寄贈したのです。

※3 書生 … 家事を手伝いながら勉強する学生。

※1 結核 … 結核菌の感染によりおこる病気。

※2 夜鳴きそば … 夜、屋台で町を流しながら売られるそばのこと。

福部の医療・文化の礎を築いた医師 瀨本信雄はまもとのおお



一八九六年（明治二十九年）現福部町海士あもつに生まれた信雄は、岡山医科大学で医学を学びました。その後、神戸市に医院を開業し、たいへん評判になっていました。

信雄の同級生に、合併した当時の福部村の初代村長である田中孝寿がいました。合併した当時の福部村は、四千人の村民をかかえていたにもかかわらず、無医村でありました。病人は鳥取市まで出なければ医者にかかれない状態で、病人の苦しみと村民の不安はたいへんなものでした。

田中は、一日も早くこの状態を解決しようとして、医師を探していました。田中が白羽の矢を立てたのが、当時神戸で開業していた瀨本信雄はまもとのおおだったのです。田中によると、「医院には、抱え車夫を持ち、人力車

を駆使し、南船北馬しており、その待合室も鳥取では見られない広いものであった」と活躍を記してあります。しかし、信雄には当時神戸を離れられない事情がありました。さらに学問に励みたいという気持ちを持ち続けていた信雄は、京都大学に籍を置いて博士の学位を取ろうと論文を書いていたのです。もし、福部村に移ってしまえば、京都大学に定期的に通うことは難しくなり、学位は断念しなくてはならなくなります。

田中は、説得のために何度も神戸を訪れました。社会的に認められ成功している医院を捨て、京都大学で博士の学位をとるといふ希望も捨て、また都会の生活の中で育ってきた家族を連れて山陰の農村に村医として赴任することは並大抵の決意ではできません。田中は一心に、ただただ「郷土愛」だけ語りました。信雄の郷土を愛する心だけが頼りだったのです。

信雄はついに決意し、家族を連れて村立の診療所に赴任することになりました。福部村の道路はでこぼこ道がほとんどでしたので、信雄は自転車で往診しました。それまで自転車などに乗る機会が少なかった信雄は、よく自転車から転げ落ち、時には川にはまっつてずぶ濡れになり、田中の家からふんどしまで借りて、急いで往診先に向かったといえます。

一九三七年（昭和十二年）福部村に農村の青年を育てるための塾、「尚志塾」ができました。第四代村長、河本清が熱心に説いて回り、芦屋市に住む有馬頼吉の援助を得て、やっとでき上がった塾でした。信雄もこの塾の創設のために走り回り、開設後は無報酬で「論語」の担当をしました。第二次世界大戦が本格化し、塾の運営が難しくなっただけでも、信雄は、河本塾長とともに熱心に青年教育に打ち込み、一九四三年（昭和十八年）までこの事業を続けました。

この塾で信雄の教えを受けた人たちが、戦後の福部

村を支える大きな力になっていきました。

尚志塾が開設されようとしていた頃、信雄は、もう一つの大きな事業に取り組んでいました。一九三八年（昭和十三年）再び村長の役についていた田中孝寿と二人三脚で、「福部村国民健康保険組合」を創設しようとしていたのです。相互扶助の考えに立つ国民健康保険は、将来的に非常に大切なものになると、二人は考えていました。しかし、国保の創設にはたいてい大きな困難がありました。一つは保険料の問題です。元気な人が病気の人の医療費とともに負担するわけですから、人々の意識が深まらないと保険に入る人が多くなりません。もう一つは、医者側の抵抗です。国保が導入されると事務手続きが面倒になるといえるのです。どちらの問題も、人々の意識を変えていかなければどうにもならない、難しい問題でした。

しかし、現金収入の少なかった当時の福部村では、

医療費が準備できないばかりに医者にかからないというような重病人もあり、普段からお互いの助け合いによって医療費を作っておく健康保険の制度は、ぜひ必要なものでした。二人は村民、近在の医者に粘り強く呼びかけ、一九三八年（昭和十三年）「福部村国民健康保険組合」は県下に先駆けて設立されました。そのおかげで福部村の保健医療事業は本格的なものになっていきました。

戦後も信雄は、福部村の保健医療の発展と青少年の育成に努めました。新制中学校ができた一九四八年（昭和二十二年）からは福部中学校の校医を務めるだけでなく、学校関係者の立場から助言も惜しみませんでした。また、昭和二十三年、中学校新築を願って、多額の寄付を申し出ました。

自宅には、村の若い者が何人も集まり、文学や哲学、人生の悩みを語る場となっていました。戦前の尚志塾の理想は、いつまでも信雄の心の中にありました。

そこに集まっていた若者の一人は、信雄についてこう語っています。

「近くにある時は気のおけないおじさん、ただの人で、離れてみれば高く光って見えた。」

初代田中村長の「郷土愛」の言葉に押され、神戸から福部村へ帰り、一九六五年（昭和四十年）に亡くなるまで、信雄は、福部村の文化や医療の充実だけでなく、福部村の青少年が社会に大きく羽ばたくことを願い続けました。

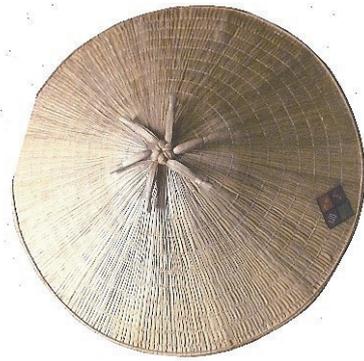
（福部未来学園 自作）

参考文献

・『新編福部村誌』

すげ笠に込めた思い

（村上秀男）
むらかみひでお



「鹿野のすげ笠は、亀井の殿さんが始めたんよ。かぶつとると夏は涼しいし、雨もよけるんだって。」

鹿野といえば「すげ笠」。町の人に尋ねると、誇らしげにそう答えます。

手仕事の良さが伝わるすげ笠。きれいな円錐形、繊細に編み込まれた「すげ」。すげという植物は、雨にぬれると水を含んで広がるため、少々の雨水も、真夏の直射日光も通しません。乾くと縮まり隙間ができるため、通気性は抜群です。しかも軽くて、頭は蒸れません。傘の下は緑の木陰のように爽やかです。耐久性にも優れ、手入れを怠らなければ、五、六年は使えます。

鹿野のすげ笠、その歴史は四百年前にさかのぼり

ます。鹿野城主、亀井茲矩^{これのり}。地元ではだれもが知る戦国武将。江戸時代初期、日本が鎖国する前、幕府から朱印状をもらい、貿易船を派遣して積極的に海外との交流をすすめました。海外の珍しいものを持ち帰り、利益を得ていました。鹿野町では、古くから地域で、すげと呼ばれる植物がよく採れました。すげは、稲作に向かないやせた土地にもよく育ちます。亀井氏は住民に対して農閑期（冬場など）の副業としてすげを利用した笠作りを奨励しました。それが伝統ある鹿野すげ笠の始まりとされています。

村上秀男^{むらかみひでお}さんは、鹿野町山根町^{やまねまち}で生まれました。子どもの頃は、一家総出ですげ笠作りをしていました。すげ笠作りの工程は、いくつも細かく分かれていて、その一つ一つは実に複雑でした。ですから、家族で輪になって和気あいあいと作る。祖父や父が、竹や竹の皮で笠の「骨組み」を作る。祖母や母が、骨組みにそってすげを横にくくりつけ「下地まき」を行う。すげを縦にならべ、竹ひごでおさえて「へいりづけ」を行う。針と糸を使って縦のすげをぐる

りと縫っていく「縫い」を行う。

「専業農家だった祖父や父が、販売用のすげ笠を作る姿は、今も記憶に鮮明に残っている。自分も簡単な作業部分を手伝っていたのが懐かしい。」

村上さんは、小さい頃は「下地まき」を手伝ったり、図画工作ですげ笠づくりの風景を描いたりもしました。美術が得意で、中学生のときには、描いた絵を校長室に飾ってもらえました。

成人し、会社勤めを始めた後には、直接すげ笠づくりにかかわることはありませんでしたが、両親や祖父母とともにすげ笠はいつも生活の中にありました。

昭和三十年代、鹿野町のすげ笠作りは、戦後ますます盛んになります。当時、約七十軒の農家二百五十人が従事していて、年間八万枚も生産されました。また、販売のために組合が発足し、アメリカにも輸出されました。鹿野すげ笠は質がよいと評判になり、鹿野町の一大産業となっていきました。

ところが、昭和三十年代後半に入ると、高度経済成長を迎えた日本では、安価なビニールやナイロン製のカッパや傘が普及し、鹿野すげ笠の需要は減っていきました。すげ笠の作り手は次第に高齢化し、一人また一人と、生産から離れていきました。そして組合がなくなると同時に、だんだんとすげ田もなくなってしまうました。

平成二十年、当時の平松大阪市長が鳥取市を訪問したときに、竹内鳥取市長とすげ笠をテーマにした交流が行われました。それをきっかけにして、平成二十一年、鹿野町内の有志や町おこしの関係者が集まりました。

「このままでは鹿野の伝統が途絶えてしまう。」
「なんとかさせないけん。」

村上さんをはじめ関係者のほとんどが、鹿野町のすげ笠作りが衰退し、地域の文化が失われていくことへのさびしさを感じていました。村上さんは、
「せめて親から引き継いだ『すげ田』だけは荒らし

たくない。いつかは自分もすげ笠作りに挑戦してみたい。」
と、思うようになりました。

「自分たちの代で、鹿野の四百年続く伝統を途絶えさせるのは、しのびない。次の世代に引き継ぎたい。」

すげ笠を作れる人や、すげ笠そのものを残したいという思いが村上さんの中でどんどん強くなっていきました。

こうして、鹿野すげ笠の消滅の危機に奮い立った村上さんは、わずかに残っていた作り手や近隣住民に呼びかけました。長年、鹿野町で理髪店を営んでいた池本さんを、

「理髪店は、手先が器用だろう。」
と、すげ笠作りに誘いました。こうして、池本さんと共に、失われつつあった鹿野町のすげ笠文化を、守り続ける活動に邁進しました。

やがて村上さんの住む山根町から、たくさんの



人がすげ笠作りに集まるようになりました。平成二十一年三月、地元の有志約二十人で『鹿野すげ笠を守る会』を結成することになりました。村上さんは会長を引き受け、池本さんが副会長となりました。

本格的にすげ笠を作った経験のない村上さんは、すげ笠を作っていた隣のおばあさんから作り方を教わることから始めました。



すげ笠作りが軌道に乗るまでは様々な出来事がありました。当時、すげ笠の材料である「すげ」の作り手は五、六人しかいませんでした。そのため材料を入手するのは簡単ではありませんでした。そこで村上さんたちは、すげの株を分けてもらい、自分たちで田に株を

植え付けて、栽培することにしました。ところが順調だと思った矢先、田んぼのあったところが道路の拡張工事により整備されることになり、せっかく育てたすげの半分がだめになりました。それでも、村

上さんたちはあきらめませんでした。休耕田を借り入れて、もう一度一からすげを栽培し始めました。

すげは、間引いていかなないとどんどん増えて、一株の大きさが小さくなってしまいます。そうなる并使用物にならないので、手入れが欠かせませんでした。手が足りないときは、山根町の人にも声をかけて手伝ってもらいました。



また、人によって少しずつ笥の作り方が違っていたので、鹿野すげ笥として商品化するにあたり、大きさや縫う段数などを、話し合って統一しました。そして、すげ笥の注文が入るとそれぞれ会員に割り振って仕上げ、鹿野町内の四か所で販売をしていきました。

月に一回集まる講習会には、鳥取市内や倉吉市、遠くは広島県から足を運ぶ人もいました。地域外から多くの人が集まり熱心に習う人がいるといううれしさがある一方、地元の人にもう少し加わってもら

えるようにならないか、という悩みもありました。

そこで、平成二十二年から、鹿野中学校（現在の鹿野学園）で中学生にすげ笥の製作体験学習を始めました。

「ふるさと鹿野を誇る気持ちが芽生えてくれたらうれしい。」

中学生と共に、地域のイベントにも参加し、すげ笥のレンタルもしました。かぶってみると、その涼しさがお客さんに大好評でした。

活動は地元だけにとどまらず、技術交流として、大阪の『深江菅



細工保存会』と交流を続けました。その交流を通して、すげコースターという商品も生まれました。特産やお土産として根付いてくれないかと、力も入れました。もちろんすげ笥だけを作って、それで儲かるということはありません。しかし、それでも村上さんは、歩みを止めることはありませんでした。

『鹿野すげ笠を守る会』の発足から十年が経ちました。

「苦労の方が多かった十年でした。」

「やめたら、みんなが困る。」

村上さんは、現在八十歳。会員は十名ほど。今では年間百枚を作るのが限界。現在すげ笠の技術を伝承しているのは、男性一人、女性一人だけになってしまいました。

「熟練の作り手は、もう、二人だけしかおらん。このままでいけば、伝統が途絶えてしまう。跡を継ぐ者がおらんようになる。」

毎月第二土曜日の夜に、山根町集会所で開催されるすげ笠講習会。玄関を開けると、すげのよい香りと笑い声。村上さんは同志である池本さんと共に、今日も、世間話を交えながら、和気あいあいとすげ笠作りの技術を教えています。

「幅一センチ足らず、長さ約五十七センチのすげを円形の枠に沿って、一本ずつ丁寧に編み上げる。根気のいる作業だが、徐々に笠の形になるとき、や

りがいを感じる。」

「丹精込めたすげ笠で、貴重な文化を守りたい。ひと編み、ひと編み、手間と時間はかかっても、次世代へ。」

(鹿野学園 自作)

参考資料

・『日本海新聞』

・『鳥取市広報誌』



鳥取市小・中・義務教育学校道德郷土資料集 第3編 作成検討委員会委員

	氏名	所属	職名
1	渡邊直子	鹿野学園	校長
2	梶浦紀生	佐治小学校	校長
3	福壽真一郎	津ノ井小学校	教諭
4	中川 崇	岩倉小学校	教諭
5	米澤晶子	若葉台小学校	教諭
6	中林永成	瑞穂小学校	教諭
7	村中ひろみ	北中学校	教諭
8	山口正子	青谷中学校	教諭
9	坂口留果	福部未来学園	教諭
10	前田静香	鹿野学園	教諭

鳥取市教育委員会学校教育課関係者

尾室 高志

吉田 博幸

岸本 吉弘

田中 浩史

福田 美奈

●表紙・表紙裏の題字

柴山 抱海

●写真や図版の提供

鳥取市立神戸小学校
鳥取市立西郷小学校
鳥取市立瑞穂小学校
鳥取市立鹿野学園

鳥取市立世紀小学校
鳥取市立佐治小学校
鳥取市立福部未来学園

山下 和宏 氏
松保地区公民館
福田 典高 氏
鳥取県立図書館
石田 一高 氏
岡田 良平 氏

牛尾 晃之 氏ご親族
福田 源衛 氏ご親族
塩谷定好写真記念館
下村 益雄 氏
村上 秀男 氏

令和2年度

鳥取市小・中・義務教育学校道徳郷土資料集第3編～児童・生徒用～

「鳥取市の志」

令和3年3月31日

編集・発行	鳥取市教育委員会学校教育課指導係
所在地	鳥取市幸町71番地
電話番号	0857-30-8412
印刷会社	(有) 蛍光社

